

註解をはじめるに先だつて

5

本書は、すでに「序に代えて」で述べたように、持続しつづおのずから変貌する心の経験の過程が『精神現象学』でヘーゲルの述べる経験の過程とどのように交叉するのかを確認することに第一の関心がある。その関心を生かすにはまずもつてヘーゲルが判断を組みあげていった過程を冒頭から追わなければならぬ。しかも既知の知識や理解にもとづくのではなく、文章の内容を文章それ自体から引きだすことが不可欠である。ヘーゲルの判断のゆくえを確かめるこの作業は、否応なく分析を主体とした註解という形式をとらざるをえない。記された文字を一字一句おろそかにせず、個々のことばをくりだす思考を掘り起こさなければならぬからである。このよきな作業をすることは『精神現象学』を一冊の書物として受けとめることを意味する。

10

一冊の書物として受けとめるということは『精神現象学』を、なによりもまず、ひとりの人間が書いた一冊の書物として受けとめることにほかならない。検討するべきものが文章——より広くはことば——であるという事実からはじまるからである。当然、一般に文章を検討するときと同じく、著者ヘーゲルがどのような現実に立ち、どのような視野をいだいていたか、その視野のもとでどのような叙述の場を設定していたかなどを文章それ自体から確認する必要が生じてくる。ヘーゲル特有の語であるうと、一般的な語であるうと、個々の語義も確定しなければならぬ。文法的な確認も必要になる。要するに、この註解では、一般にひとつの文章を読み解くときにもとめられる作業がすべて必要になってくる。読み解いてゆく過程でヘーゲルの学説と言えものが浮かびあが

15

1
るとしても、それは第一義的な意味をもたない。学説はひとりの人間の発したひとつのことばとして受けとめられ、発した人間であるヘーゲルとの相関において検討され、なぜヘーゲルがそのことばを述べることができたのか、どのような経験や認識からそのことばを発したかのほうが重視される。ひとりの人間であることをまぬがない個々の人間の発することはを理解するときには、その人間がなぜなにを基盤にどのように語れたかがなによりも大切になるからである。

5
本註解はこうした態勢を読解の原則として定め、本論の「意識」から文章の検討をはじめている。序文に相当し著しく性格の異なる長短二本の文章（序文と緒論）はなお一般的な叙述に終始しており、組み上げられた判断が実際に展開するのは本論からだからである。

10
註解に先だって語っておくべきことはこれで充分であろうが、なお一言、この註解はヘーゲルの思想がわかったから書くのではない、という点を補足しておこう。書かなければわからないから書く——これがこの註解を実際に試みた最終的な理由である。

15
註解書は一般にわがろうとする読者を念頭に書かれる。著作の成立事情、執筆の時代的・思想的背景、重要語句などを解説し、各章各節の内容から、その内容と著者の基本思想との関連や時代の意義にいたるまでを、かみ砕いて説明するのが通例のようである。そのような註解は内容がすでにわかって初めて可能になる。ところが、個々の文を記していたときにヘーゲルの考えていたことを理解しよう、その思考の展開を逐次たどろうとする努力の一環としておこなわれる註解には、あらかじめどのような形式があるわけでもない。文字どおり一字一句を追いかける以外に方法がない。それが以下におこなう註解の形態を決定している。だから文章の検討は註解という名称がふさわしいかどうかも度外視しておこなわれている。

実際におこなわれる個々の分析の正否は、おおよそのところ、註解者がヘーゲルのことばを照らし合わせるために想定した現実の妥当性と、分析過程の適否に依存するであろう。照合のために想定した現実には、膨大な数の人々が経験をとおして見知っていると想定される現実である。それも第一に二〇世紀後半から二一世紀初頭にかけて日本語を母語とする人々が生活してきたと想定される現実である。

以下、この著作の第一章とも言うべき「A 意識 I 感覚的確信、あるいはこのものと思いなすこと」の本文から検討にはいることにしよう。本註解で利用した文献の主なものとは簡略的に注に記しておいたが、詳細な記述は注に記さなかつた文献とともに巻末の一覧にかかげる。

第一章 「A 意識 I 感覺的確信、あるいはこのものと思いなすこと」の検討

5 (一) 第一段落

冒頭の文を、哲学の分野でよくもちいられる語彙を利用し、なおかつドイツ語での文構造が——英語を学んだ人にとっても——透けて見えるように訳すなら、「最初に、あるいは直接にわれわれの対象となる知は、それ自体が直接的な知、「つまり」直接的なものないし存在するものの知以外のものではありえない」となる。

10 これで一応のところ日本語で冒頭の文を読んだことになるが、一読しただけではなんのことなのか、なにが書いてあるのか、ヘーゲルがなにを言いたいのか、ほとんどわからなところがない。註解の始めとなるここでは、その理由を明らかにするわけではないが留意すべき点と、理解したい理由を二点（「翻訳につきまとう原語と訳語の意味上のずれ」と「文の構成それ自体に入ってくる著者の思考」）挙げておきたい。

一 ヘーゲルの文章を検討するとき、最初にこのように訳す方法は今後とも一貫して採用する。この冒頭の文の場合、文構造云々にかかわるのは、①関係節の使用、②「つまり」をおきなった同格、の二点。岩波全集訳は一九七一年の出版なので①の点で古さを感じさせる。長谷川訳ではドイツ語の文構造が見えてこない。牧野訳も同じである。以上からこの三訳を援用することは避ける。なお補足すると、この訳は檜山訳に近い。

1 留意すべき点——「われわれ」

5 学術書や学術論文では著者ないし筆者が自分を指すときに「われわれ」をもちいることが通例であり、また慣例ともなっている。ここでその理由を仔細に問うことは控え、ただ、訳出した文中にてきた「われわれ」が——複数ではあっても、実際には——『精神現象学』の著者ヘーゲル以外の者を指すことはありえない、という点を確認しておくだけにとどめておこう。この確認にもとづくかぎり、本文中の「われわれ」は端的に「私」と読みかえて読めばよいことになる。当然、冒頭の文は「最初に、あるいは直接に私の対象となる知は……」と書きかえられる。以後、「われわれ」と訳す必要が生じないかぎり、「われわれ」は一貫して「私」で書きかえることにする。

10 このように書きかえるなら、誰を指しているのが不明確で、自分を棚上げするのに、あるいは自分を隠すのに都合な「われわれ」によって入りこみかねないごまかしや執筆態度にひそむ甘さを見ぬけるようになるであろう。またヘーゲルが「私」と語るたびに、その「私」が読者である自分ではないことに想到せざるをえず、読者としての自分を失念する弊害も避けられるであろう。この指摘ないし心構えは、ヘーゲルの言葉の不用意な点を見のがさないためであると同時に、ヘーゲルのもたらしめてくれる知見に親しく接しているうちに、いつしか——それも無自覚のうちに——その知見が自分のものであるかのような錯覚におちいる危険を回避するための用心である。

15 翻訳につきまとう原語と訳語の意味上のずれ

次に理解したい理由に移ろう。第一に挙げられる理由は原語と訳語の意味上のずれである。それは、原語が

1 ドイツ語のなかで一般に了解されている意味と、訳語として選ばれた語が日本語のなかで了解されている意味とが、充分にかさなりあわず、そのために生じるずれである。この種のずれは外国語をあつかうかぎり避けようがない。冒頭の文の場合、このずれに当てはまるのは訳語「知」とその原語 *Wissen* である。

5 1) の *Wissen* は動詞 *wissen* を大文字で書きはじめて、そのまま名詞にした語である。辞書では、動詞の意味を「(抽象的知識・情報として) 知っている、(…のことがわかっている)」と記す。これはたとえば日本語で「それくらいのことには知っている」などと語るとき「知る」で、なんの変哲もない日常語である。しかしそれだけではなく、知る内容おうじて「わかまえがある」や「心得がある」などの意をおびることがあるのは、日本語の「知る」が「世間を知る」のように種々の含みをもつことと同様である。したがって、ここでドイツ語と日本語との双方の意味・用法を考慮したうえで、日本語で *wissen* の意味を簡潔かつ簡略的にまとめるなら、「対象の知識や理解をもっている」と整理することができるであろう。

10 名詞 *Wissen* の意味を確定するときには、もうひとつ考慮しておかなければならないことがある。それは動詞

15 一 英訳では *knowing* ないし *knowledge*。仏訳では *savoir*。考察主体が対象をみずから体験する点を前面に押しだすなら訳語は *connaitre* (対象が精神に現前する) ないしその名詞 *connaissance*。 *wissen* はそれを前面に押しだす必要がないので *savoir* になっていると推測する。この対比は英語では表現されない。 *savoir* と *connaitre* の区別はドイツ語における *wissen* と *kennen* の区別に対応する。ヘーゲルが *kennen* ではなく *wissen* をもちいた点を考慮するなら、ヘーゲルは *wissen* のほうを重視していたと見るべきであろうが、幼児から体験を重ねるプロセスが皆無のときに人が *wissen* を獲得することはありえない。 *wissen* は *kennen* をついで成りたつていてと考えなければならぬ。この点はヘーゲルが *wissen* をこのようにとらえていたかを理解するときの着眼点のひとつになる。

1 を名詞にしたときに基本的に名詞が帯びるようになる意味である。具体的には、①「〜すること（その行為なし活動など、文脈に応じて限定する）」、②「〜することによって生まれたもの」の二義である。前者では動作の念がそのまま保たれるが、後者ではその念が消える。

5 5 ①の意は記載されていない。しかし、本文でヘーゲルがどのような *Wissen* を念頭においているかは、いまだまったく不明なままである。ここでは念のために双方を考慮に入れておき、検討が進んで修正が必要になったら修正することしよう。このように用心して名詞 *Wissen* に眼をむけるなら、その意味を十分に反映した日本語の表記とはいえないが、①として「知ること（知るという活動）」、②として「知識・理解」、の二義が得られる。後者をふたつに数えるなら、都合三つの訳語が得られたことになる。

10 10 では、訳語として三語あるとき、原文の *Wissen* をどの語で訳せばよいのか。どの訳語をもちいるかは原文の理解に直結しており、ないがしろにすることができない。

15 15 現在の日本語の語法を考慮するなら、「理解」に動作の念を読みこむことは可能であるが、「知識」には不可能である。さりとて、「知ること」では、その結果である「知識・理解」のほうを意味することができない。このように、*Wissen* に対応する訳語が複数あり、そのどれもが一語で他の語の意味をあらわすことができないという点を考慮するとき、はじめに訳文で利用した「知」は、「知る」という活動なし「知っている事柄」を包括

一 これはドイツ語だけでなく英語でも動詞から作られた名詞が基本的に帯びる意味である。

二 フランス語の *savoir* も同様であり、これは「知っている内容」である「知識・理解」を包括的に意味する。

1 的に一語であらわそうという試みから生まれ、それが哲学やその周辺で通有のものになったのではないかと推測することが可能になる。

5 しかし「知」は日本語の語彙として一般に受け入れられているほどではない。一見して生硬な訳語と見なす人は今なおめずらしくない。日常の会話や談話のなかでもちいられることは、大人の場合でも、ほとんど皆無である。ところが原語の動詞 *wissen* のほうは、子どもでも用いる日常語である。名詞の *Wissen* となると日常語ではなく大学人が稀にもちいる程度に頻度が低下するとはいえ、その基本義は動詞に根をおろしており、日常語と文章語とは意味の点でつぎめなく連続する。「知」は、日本語の語法に照らしても、ドイツ語の語彙のなかで原語が占める位置に照らしても、まったく不適切である。訳語に導入したときの意図がなんであれ、「知」が簡便ではあるが、舌足らずの便法であることには変わりがない。結局、*Wissen* の簡潔かつ適切な訳語はないと考
10 えなければならぬ。

文の構成自体に入ってくる著者の思考

ではどうするか。あらためて冒頭の文に眼をむけ、文の構成を検討することにしよう。これが理解しがたい理由の第二にかかわるからである。

15 この文では、最初に *Wissen* が提示される。この *Wissen* は実質的に『精神現象学』と呼ばれる書物の冒頭の一句である。ついでその *Wissen* が「最初に、あるいは直接に私の対象である」と関係節で限定される。

この書き方は示唆的である。一冊の書を著そうとするときには、万象ごとごとくが対象になりえるが、この書き方は著者ヘーゲルがその万象のなから *Wissen* を取りあげ、まずそれを考察の対象に据えたということを含

意する。一書の実質的な冒頭に *Wissen* がおかれ、次いでそれが関係節で限定され、それから述語を記すという書き方は、文の構成それ自体に、その文を発想するにいたる過程までもがふくまれていないことを意味する。

この書き方はドイツ人学者がドイツ語で書いた学術書の文章として別にめずらしくはない。この点は他の欧米語にも一般的に言えることであろう。しかし、日本語を母語として育ち、硬質の文章表現に慣れていない人にとっては、ものごとの言いあらわし方として、かなり異質に感じられるにちがいない。原文のように、文を発想するまでの過程が文構造に読みとれない点では、冒頭の文自体が日本語の文として舌足らずであると言うこともできる。舌足らずという点では——なかば言いがかりになるが——「私の対象となる」もそれに該当する。ヘーゲルはここで *Wissen* を考察の対象としているのだから、「私の対象となる」は実質的に「私が考察の対象にする」の意である。

それなら、①動詞の *wissen* が子どもでも普通にもちいる日常語であり、ドイツ語の基礎語彙に属するという事実、②ひとことに対応する適切な訳語がないという事実、③文構造からとらえられる、考察対象を提示するまでの過程、以上の三点を考慮にいれ、冒頭の文を「私はこれから知ることがどのような活動であり、その結果うまれる知識や理解が一般にどのような性質をもつのかを考察することにしよう。そのときにまず考察の対象となるものは……」¹と言いあらわすことが可能になる。

叙述の場

一 一これが翻訳なのか翻案なのかはここで不問に付す。敷衍が必要な理由は第一段落の検討を終えたときに述べる。

1 これで一応のところ冒頭の文でヘーゲルがなにを言わんとしていたかが明らかになってきたが、最初に提示された Wissen についている定冠詞の働きからは、さらに読みとれることがある。それもまた冒頭の文がなぜ理解したいかの理由を説明しており、ここで定冠詞の働きを無視することはできない。

5 定冠詞は対象を指示する「その」が基本義である。より正確には——基本的に現実に存在するものを指す指示形容詞（英語なら this や that など）と異なり——話し相手ないし読者（以下「読者」）の念頭に訴えた「その」である。「その」と言ったらなにを指しているかが読者にわかる『その』である。ただ、なにを指しているかが読者にわかるかどうかを判断するのは話し手ないし著者（以下「著者」）なので、さらに詳しく言いあらわすなら『その』と言ったらなにを指しているかが読者にわかると著者が想定した『その』である。この定冠詞の働きは著者がすでに——無自覚にも——**叙述の場**を設定していなければ成り立たない。定冠詞があらわれるまえに、「その」と言えば読者がわかるものが存在していなければならない。

10 幸か不幸か現実の理解は人によつて異なる。同一のように見えても、仔細に見れば違いがあらわれてくる。それなら——そしてこうした違いがない場合でも——著者となる者は自分が語ろうとするものを、読者が受けとめられるように、つまり提示したものを読者が自分の理解する世界のなかに順次位置づけられるように、提示しなければならぬ。しかも、読者にとつてのわかりやすさを考慮に入れるなら、著者はこれから語ろうとするものが存在することから、叙述をはじめなければならぬ。幼児期に寝物語に聞かされた昔話——「昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんがいました」——は、そのもつとも基本的で素朴な形態である。

15 そのように語るなら、著者は自分のことばを通して、読者とのあいだに——しかも読者と共有する——理解の場をつくることができる。その場を称して右に「叙述の場」と呼んだのである。この場は「コミュニケーション

1
の場」と言い換えてもよい。これは著者と読者がたがいにことばを介して共通の理解をつくりだすための場である。

5
語り方が拙劣であろうと性急であろうと、読者に語ろうとしてことばを重ねるかぎり、著者はこの叙述の場をつくり続ける。定冠詞はその叙述の場に提示されたものを指して、したがってすでに読者が理解したものを指して、「その」と言う。「その」と言えば叙述の場で指示する対象がどれであるかがはっきりし（限定され）、なにを指しているか読者がまぎれなくわかるはずのものを指して「その」と言う。またそのように定冠詞をもちいるのが欧米語の語法である。

10
以上の点を考慮に入れて冒頭の文を敷衍するなら、「一般に Wissen と呼ばれるものがある。少なくともドイツ語を知っている人なら、こう語ることで念頭に思い浮かぶものがあるだろう。私はこれからその Wissen（知ること）を考察の対象に取りあげ、それがどのような活動であり、その結果うまれる知識や理解が一般にどのような性質をもつのかを考察することにしよう」となる。

瞭然とする。文意もより明瞭になっている。だが全面的に明瞭になったわけではない。

15
見知った現実の世界に位置づけがたい「その」Wissen

なお不明瞭な点がこのころのは、「最初に、あるいは直接的に私が考察の対象にすえた『その』Wissen は」と言われても、読者は「その」と指示された Wissen を自分の見知った現実のなかに位置づけがたいからである。同じ文構造をとった「先週私が訪れた家は」なら、英語でもドイツ語でも関係節で限定された「家」にはやはり定

1 冠詞がつき、その指示の働きも訳文に組みこんだ場合、「先週私が訪れた『その』家は」となるが、それで読者がこまることはない。読者はまだどの家かはわからないが、現実存在する家のひとつを指しているのだからと想定して次のことばを待つことができる。自分の見知った現実を背景に、著者が設定しているだろう叙述の場を暫定的にでも共有することができる。

5 読者がそのように叙述の場を共有できるのは、著者が「先週私が訪れた家は」と語ることによって、特定の時と場にある自分と対象を現実の世界に——読者と共有する現実の世界に——結びつけたからである。大げさに語るなら、著者は歴史の流れのなかにある特定の現実の世界に、著者も読者もひとりの人間として存在する現実の世界に、自分と対象を結びつけたからである。叙述の場は、本来、このようにして初めて成立する。

10 ところが、冒頭の部分の場合、読者はヘーゲルが念頭に想いえなく Wissen を現実の世界のなかに位置づけることに困難を感じる。あるいは、ヘーゲルがつくっているはずの叙述の場を共有しようとしても、その手がかりがつかめず、手をこまねく結果になる。

それは対象が Wissen だからである。あるいは「直接的なものの Wissen」となっているからである。対象が個別のもの、Wissen なら、すぐ内容を想い描くことができる。しかしヘーゲルの語る Wissen は現実に存在するあらゆるものの Wissen のようである。内容があまりにも一般的で、この Wissen は対象としてとらえどころがない。いきおい、自分の見知った現実の世界にその Wissen を位置づけようにも、どう位置づけてよいのかわからない。著者がつくっているはずの叙述の場を共有しようにも、共有しようがない。

15 卑近な語り方をするなら、その Wissen は眼に見えない、耳に聞こえない、家や山や川などと違って個物として想い描くことができず、具体的なイメージを想い描くこともできない、指し示された対象である Wissen を自

分の見知った現実のなかに位置づけようとしても、確かな手がかりが得られないのはそのためである、と語ればわかりやすいかもしれない。小説なら、読みはじめて間もなく、作家のえがく場面に吸いこまれ、逐次自分の理解を広げることによって、作家が設定した叙述の場を読者も共有し、擬似的現実ではあっても、そのなかにどっぷり浸かることができる。しかし冒頭の文では、このような理解のプロセスが成立しない。

定冠詞の検討から浮かびあがる『精神現象学』の文章の特質

要するに、冒頭の定冠詞はヘーゲルの念頭にいだかれた対象を指し示すだけにとどまる。そのため叙述の場が生まれない。あるいは読者は生まれているはずの叙述の場に参加できない。どの文章でも著作でも、いくばくかでも叙述がすすむなら、そのことばをおして叙述の場——読者と共有する理解の場——がつくられてくるはずである。ヘーゲルがどのような読者を想定していたかはいまだ検討の段階にいたっていないが、読者が皆無のところでは書物を執筆しようとする意志自体がそもそも成りたらず、読者の存在はかならず前提されていたはずである。「最初、あるいは直接に私の対象となる Wissen は」という書きだし自体が、順を追ってものごとを提示しようとする意図を伝える。ところが、その意図のもとにつくられていたはずの理解の場が、実際には生まれていない。

ヘーゲルの語る内容はまだ現実の世界と結びついていないのである。

定冠詞の考察から導きだせたこの指摘が意味するところは大きい。文章を書く者は歴史上の特定の場、特定の時に存在して、文章を書く。しかしその内容が歴史の流れのなかにある特定のものに結びついていないとき、あるいは内容が一般的な水準にとどまっているとき、文章の内容は万人がみとめる現実との関係ではなお現実性を

1 獲得しない。その文章は書く者の存在を証するだけにとどまる。冒頭の文で現実と結びつく要素があるとするなら、それはなにごとかを語り説明しようとしている著者ヘーゲルの存在だけである。「主観的」という語を「叙述者の存在を指し示す状態にある」と解するなら、冒頭の文で著者ヘーゲルはまったく主観的であると言っても過言ではない。読者は叙述するヘーゲルの脳裏を覗くことを強いられる。

5 読者はヘーゲルの脳裏を覗いて、ヘーゲルが思考を展開しながら設定しているつもりでの叙述の場に、みずから加わろうと努めなければならない。あるいは、ヘーゲルが展開する理解の場を、みずから自分の理解の場でもあるように変えなければならない。つまり、ヘーゲルがつくっているはずの叙述の場を、自分でもつくらなければならない。一方でヘーゲルの思考の筋道を追いながら、他方では自分をふりかえり、自分のなかで Wissen と言われるものの輪郭をとらえなければならない。ヘーゲルの語る Wissen と自分が Wissen と思つるものとを比較対照しながら、文章を読みすすめなければならない。ヘーゲルは『精神現象学』でこのような二重の活動を読者に要求する結果になつている。これが『精神現象学』の文章の特質である。この著作がどのように書かれているとあれば、読者はこの特質をふまえて先を読みすすめる以外にない。そう心得て次に問題となる「直接に」を検討しよう。

10 「直接に」、すなわち「直接的に」

冒頭の文を敷衍した文章（八頁）に「直接に」はまだ組みこまれていない。その原語 unmittelbar である。この語は形容詞と副詞としてもちいられる。ここでは形容詞として語の構成から検討をはじめよう。この形容詞は三つの要素からなる。接頭語の un-（形容詞につけて「否定・反対」の意）、mittel-（中間にあるもの・介在す

るもの・媒介物)、par (「:の状態にある」を意味する形容詞語尾) から合成された語である。それぞれの要素の持つ意味を組みあわせて訳すなら、「中間のものないし介在するものがない状態にある」となる。ヘーゲル関連でよくもちいられる語を利用するなら「無媒介の状態にある」である。ではその場合の「介在するもの」ないし「媒介」の意味はなんなのだろう。その意味がわからなければ、この語が「直接に」と訳される理由もわからない。

あらためて冒頭の文が書かれるまでの過程を手がかりにこの疑問を考えてみよう。著者ヘーゲルが Wissen を考察の対象に据えるまでの過程に介入しているものは、ヘーゲル自身が Wissen を対象に据えようと決めたことだけである。それ以外のものは介入していない。

この事態は『精神現象学』が著者の決定を起点としていることを意味する。ところがそうであること自体は記されていない。それなら、この決定も一書を構成する要素のひとつとして受けとめ、「考察をはじめ以前に現実に存在するとみとめ、わざわざ言語化しない」ことを「前提する」と呼ぶことにしよう。その場合、人間に——具体的にはヘーゲルに——考える能力があることは、この「前提」にふくまれてくる。決定することには常に意志がともなうという点に着目するなら、『精神現象学』を書くことに決めたときのヘーゲルの意志も前提にふくまれてくる。

人間には一般に考える能力があり、なにごとかを意志する能力もあり、その一人であるヘーゲルが Wissen を

一 英語では immediate。フランス語では immédiat。双方とも語の構成はドイツ語と同様である。

二 ヘーゲルもまた「前提」をもちいる。ヘーゲルのもちいる「前提」とここで提示した「前提」の違いは後に検討する。

1 対象の考察にすえたとき、それは双方の能力の発露になる。ヘーゲルが考えるところという活動や意志の働きをどのようなものと解しているかは、いまだヘーゲル自身の説明がなく検討できないが、これまでの検討にもとづくかぎり、その実質は——考えようとする意志がはたらかないかぎり考えることは不可能なので、叙述がいたずらに煩瑣にならないように以下で意志を除外すると——Wissenを考察の対象にすえたこと、すえた内容を文で言いあらわした点、この二点である。さらにどのような実質がヘーゲルのとらえた考える活動にふくまれているかは以後の検討にゆだねるとして、人間に考える能力があることはヘーゲルの考察にとって不可欠の前提となっている。この前提はみとめなければならない。この前提がなければそもそも『精神現象学』が書かれることはなかったからである。

10 要するに、この著作においては——定冠詞の検討ですでに明らかになったように——まずヘーゲルが存在している、そのヘーゲルがWissenを考察の対象にすえているのである。対象とヘーゲルのあいだには、ヘーゲルが人間であり、そのひとりとしてヘーゲルが考える能力をもち、その能力をもちいてWissenを対象にすえたという事実以外には、なにも介入していない。あるいは介入していない。ヘーゲルがWissenを考察の対象にすえることと決めるまでにながらあったにせよ、そう決めなければWissenの考察もはじまらなかったのだから、そう考えてよい。ところがそう決めるまでの事実も前提にふくまれ、考察者ヘーゲルと対象との関係ではもはや考慮する必要がない。そうであれば、ヘーゲルは、自分がWissenにかかわることを妨げるものがない状態で、そのWissenを考察対象にすえていたことになる。

15 対象にかかわることを妨げるものがないければ、対象に直接に（間接ではなく、つまり他人からの伝言など対象とのあいだになにも介入しない状態で）かかわることができる。ヘーゲルがWissenを「直接に」対象に

すえた、と言いあらわすことは、たしかに可能である。可能ではあるが、日本語の一般語彙のひとつとして「直接に」はここで意味がとりにくく、これほど説明をくわえなければ文脈における意味が理解しがたい。それなら今後この *unmittelbar* はヘーゲル固有の用語として受けとめ、一般の語との違いをつけるため「直接的に」と訳すことにしよう。その実質的な意味は「対象と考察者とのあいだに何も介在していない」の意である。

「直接の」あるいは「直接的な」

この「直接的に」は対象にすえられた *Wissen* と考察者ヘーゲルとの関係の在り方を意味する。ところが冒頭の文によると、そのように対象にすえられた *Wissen* も「直接の」ないし「直接的な」性格をもつことになっている。「知」という訳語で便宜的に言いあらわすなら、最初に考察の対象となるものは「直接的な知」であると述べられる。その「直接的な知」は「直接的なものないし存在するものの知」であるとも述べられる。

しかしこの段階で対象である *Wissen* はヘーゲルにたいして「直接的に」存在しているだけである。それならヘーゲルはまだその内容を考えてはおらず、内容についてはなにも語れないのではないか。このような疑問が浮かんでくる。その疑問は次のように言いあらわすことも可能である。*Wissen* にどのような性質があるのかさへまだ不明なのではないか、あるいは *Wissen* の活動がその対象（直接的なもの）に考える作用をおよぼしている

一 ドイツ語で形容詞はそのまま副詞にもちいられる。表現をできるだけ変えずに形容詞としての *unmittelbar* を訳せば「直接的な」と「直接的な」の双方が可能である。副詞を用語として「直接的に」と訳すことにした点を考慮して、以下「直接的な」を訳語とする。

1 かどうかさえ明らかではないのではないかと、と。

ところが、それにもかかわらず、ヘーゲルは対象にすえた Wissen を「直接的な知」であり、それが「直接的なものないし存在するものの知である」と述べる。なぜそう言えるのか。「直接的なもの」がなぜ「存在するもの」と言いかえられるのだろうか。

5 この疑問を解決するために、あらためてヘーゲルが Wissen を対象にすえたときの状態にもどろう。

その状態は、人間に一般に考える能力があり、そのひとりであるヘーゲルにも考える能力があるということを前提として可能であった。ヘーゲルがこのように人間の一般的な状態を前提としているなら、その状態にそなわる他の能力も前提された状態にふくまれていると考えなければならぬ。たとえば、人間には見たり聞いたりする能力があることも前提となっていた、と考えなければならぬ。

10 そもそも、考察対象 Wissen の在り方を「直接的な」と捉えるヘーゲルは盲目でもなく、耳も聞こえ、触覚や嗅覚もそなえた者である。またそのような人間を前提に考えていたであろう。眼に見えるものは、見ようとするまえに見えている。音は聞きたくないときにも聞こえてしまう。見るものや聞こえる音と、見聞きする人間のあいだには、視覚と聴覚の働き以外には、なにも介入せず、なにも介在していない。もちろん、このように語るとき、光や空気存在は無視されている。しかし見たり聞いたりするとき、普段わざわざ——あるいは常に——光や空気を意識する者はいない。

15 要するに五感のはたらかさうと考える以前にはたらいっている。ヘーゲルが冒頭の文を記したとき、そのような五感の働きは、考える能力と同じように、前提とされていたと考えてよい。またそう考えなければ、本文の最初の題中にある「感覺的確信」も次段落の叙述も不可解になる。したがって五感の働きは対象との関係ではもはや

1 考慮する必要がない。

それなら、感じようとする以前にはたらく五感によってとらえられるものは、「間に介在するものがない、あるいは無媒介の状態にある」という意味で、「直接的な」と形容してよい。当然、五感の働きによってとらえられるものは「直接的なもの」と呼んでよく、その「直接的なもの」をとらえた Wissen は「直接的な知」と呼んでよい。眼にした風景や聞いた音や触ったものなど、「直接的なもの」をとらえた結果が「直接的な知」の実質をなす。その「直接的なもの」が実際にどのような存在しているかはいまだまったく説明されていないが、それでも——「はじめに」で言及した「外部」が存在することと同じく——存在していることには変わりがないであろう。したがって「直接的なもの」は「存在するもの」と呼んでもよいはずである。

10 結局、「直接的に」は考える能力を前提とし、「直接的な」は五感の働きを前提として本文に導入されていたと考えられる。

五感をそなえる者は生身の人間である。五感の存在を前提にしているとあれば、この「直接的な」は生身の人間の日常卑近な在り方をも前提として本文に導入されていると考えなければならない。ものを見るときなら、故意に垣根を透かして覗き見したりするのではなく、そして望遠鏡や顕微鏡などの道具をもちいずに、等々の意味でその意味を受けとめなければならない。

15 ヘーゲルの考察の基盤——人間の日常的な在り方

このように考えてよい理由を訊ねるなら、それは結局のところ人間には考える能力と感じる能力があるという事実に基づきする。その事実をふまえて簡略的に言いあらわすなら、すでに述べたように、ここでは感じ考える生

1 身の人間が前提とされている、と言いあらわすことができる。この前提はだれも疑おうとしないまったく当然の事実にもとづくと言ってもよい。もちろん、このように言いあらわすとき、その人間に身体も記憶力も想像力もそなわっていることは言うまでもないこととしてみとめられている。人間はそもそも Wissen として存在しているのではないとあれば、この前提は当然にすぎるほどである。

5 約言するなら、ヘーゲルは視線を自分の前方に立つひとりの人間にむけている。あるいは自分のまえにひとりの人間を対象として据える。その人間は卑近な日常のなかにある生身の人間である。ひとりの人間であるという点でこれはだれでも良く、その意味でこれは任意の人間である。「最初に、あるいは直接的に私の対象となる知」とヘーゲルが述べたとき、その「知 (Wissen)」は実質的に、こうした生身の人間だったのである。

10 この点は今後の検討にとつて基盤的な意味をもつきわめて重要な事実なので、あらためて確認しておこう。それもヘーゲルの対象とその対象を呼ぶヘーゲルの呼称との違いとして整理しておこう。

対象 日常卑近な生活のなかにある (任意の) 生身の人間

ヘーゲルの呼称 知 (Wissen)

15 哲学は生活のなかで当然とみなすこの種の認識の根拠を問うものであると言われることがある。しかし『精神現象学』に註解をほどこしているここでは、その言明にヘーゲルがどれほど正当性をあたえているかを検討することで、言明の正当性を検討すべきであろう。当然それは後の検討にまたなければならぬ。

それでも、これまでの検討の結果を承けるなら、前に敷衍した部分に欠けていた内容をおぎない、冒頭の文を

1

完全な文として示すことができる。——一般に Wissen と呼ばれるものがある。少なくともドイツ語を知っている人なら、これで念頭に思い浮かぶものがあるだろう。私はこれからその Wissen (知ること) を考察の対象に取りあげ、知ることがどのような活動であり、その結果生まれる知識や理解が一般にどのような性質をもつのかを考察することにしてしよう。そのとき直接的に (感じ考える生身の人間が存在するということ、そのひとりである私にも感じ考える能力があるということ) を前提にし、その人間に私がかかわることを妨げるものがなにもない状態で) 私の考察の対象となるのは、それ自身が直接的な知識や理解、つまり五感の働きをおして直接的に知られるもの、五感の働きをおして存在が知られるものの知識や理解以外のものではありえない。——

5

このように考察対象の Wissen を提示することは、直接的にあらざる Wissen が存在することを示唆する。Wissen には種々の形態があり、この冒頭で俎上にのっているのは「人間に五感の働きがあるということ以外にはなにも介在していない」という意味での「直接的な」Wissen で、以後はより複雑な Wissen が登場してくるだろう、ということも可能である。しかしそれはいずれ『精神現象学』を読みすすむうちに明らかになってくるであろう。その検討はそのときのことにして、ひとまず段落の最後まで眼をおすことにする。その内容はずでにこれまでの検討から十分に推測のつくものであり、その内容をヘーゲル自身が説明し、さらに自分の態度にかんする説明をおぎなってくれたものになっている。

10

15

ヘーゲルが説明する自分の態度

二番目の文は——ここでも便宜的に「知」を利用すると——「私もまた同じように直接的な、つまり〔対象となつた〕直接的な知」をあるがままに」受けとめる態度をとらなければならぬ、この知が〔私にたいして〕あらわれるがままに、だからそのなものにも変更をくわえず、その理解から概念的把握を遠ざけておかなければならない」と訳すことができる。なお「概念的把握」はヘーゲル関連の翻訳を考慮した上での訳語で、その検討は後におこなう。

この文もまた、一読して文意はとらえられたように思えるけれども、では実際にながわかつたかと自問すると、なかなかことばにならない。自分にたいしてさえうまく内容を説明することができない。自分で訳した文の意味を説明できなければ、字面は日本語であっても、訳文は日本語の文として有意味ではなく、訳者はわかつたことにならない。と言うより、わかっていない。ヘーゲルがなぜ「私もまた同じように直接的な態度をとらなければならぬ」と考えているかさえわからない。やはり少しずつ砕いてゆかなければならぬ。

まずヘーゲルが「同じように」と記した意図がわからない。この「同じように」を、文脈を考慮してやや敷衍するなら、「対象がそのようにあるなら、私もまたそのように」となる。このように敷衍した場合、そのなかにある「そのように」は「直接的に」を指す以外にない。したがってこれは「対象が直接的に存在しているなら、私もまたそのように対象にたいして直接的に存在していなければならない」となる。

一 「同じように」は *ebenso* の訳。英語なら *also* や *just as* に対応する。

二 原語は *Auffassen*。英語では *apprehend* などし *apprehension*。フランス語では *appréhender*。

三 原語は *Begreifen*。英語では *comprehend* などし *comprehension*。フランス語では *concevoir*。

しかし対象が「直接的な知」として存在しているのは、実質的に、感じ考える能力をもった人間であるヘーゲルが *Wissen* を対象にすると決めたということではなかった。そう決めた段階でヘーゲルは対象にたいして直接的に存在している。わざわざ「私もまたそのように対象にたいして直接的に存在していなければならぬ」とことわらなければならない理由はない。そのかぎりこれは冗語的である。したがってこの「同じように」はそれにくく「直接的な、つまり〔対象となった〕直接的な知」をあるがままに「受けいれる態度をとらなければならぬ」という「この知が〔私にたいして〕あらわれるがままに」との関連でとらえなければならぬ。

その心がけは「自分と対象のあいだになにも介在しないように」である。ヘーゲルのこの態度は対象を「受けいれる」という点では受動的であるが、その態度をとるということ自体は能動的である。最初の文は対象の在り方を、この二番目の文は考察者ヘーゲルの態度を述べていたのである。

一見すると難点の多いヘーゲルの態度とその真意——経験にひらかれる認識への注視

ヘーゲルは対象にすえた *Wissen* を自分にたいしてあらわれるがままにとらえようとする。ではその *Wissen* はだれの知ることであり、だれの知識・理解なのだろう。

ヘーゲルはなんの限定もしない。それなら、第一段落冒頭の文を敷衍した表現に、内容を考慮にいれ「一般に」と補足しておいたように、それはだれの知ること、だれの知識・理解でもよいはずである。だからその *Wissen* はヘーゲルの知ること、ヘーゲルの知識・理解でもよいはずである。冒頭の文だけを読むなら、対象にすえられた *Wissen* は考察者ヘーゲルの外にあるように見える。しかしそう限定しなければならぬ理由は見つからない。ヘーゲル自身が *Wissen* をもっているのだから、その *Wissen* はヘーゲルのものでもなければならぬ。そう受

1 けとめて「あるがままに」と「あらわれるがままに」を検討するとき、現在の知識水準に照らすなら、ヘーゲルのこの意図にふくまれる難点を理解することはさほど困難ではない。

対象があるがままにとらえようとしている文面に接するなら、すぐさま錯視を例にあげてその試みを否定する人がでてくるだろう。文化におうじて虹の色がちがう点をあげて同じく否定する人がでてくるだろう。少し知的訓練をつんだ人なら、対象をとらえた瞬間に対象は元の対象ではなくなっている、自分の Wissen なら、それは意識された途端すでに以前と変わっている、と指摘するかもしれない。自分の Wissen をとらえるときには、自分を対象化する必要があるが、全面的な自己対象化は不可能であり、企図自体が難点をかかえている、という指摘もでてくるかもしれない。それだけに留まらず、ヘーゲル没後から今日にいたるまでの著しい科学の発達や、進展のはげしい脳科学から得られた知見をもとに、「精神」という語自体を自分の語彙から排除し、ヘーゲルの企図をもはや無価値なものとして葬る人もいるであろう。

10 このような理解は現在かなり流布しており、ことさら取りあげるほどのものではない。そのかぎりではヘーゲルの企図自体が取るにたりないものに見えてくる。しかし以上の指摘は実際には無用であろう。「直接的」の意味さえまだ充分にわかったわけではないからである。それに加えて、ヘーゲルの記した冒頭の文は敷衍の仕方ひとつで、自分を知ることがどこまで可能なのか、という疑問をふくむものに転じる。それはもちろん、経験にもとづかずには自分を知ることのできない人間が、自分の経験をとおしてどこまで自分を知ることができるか、という疑問である。冒頭の文から「直接的に」までの文面で核心となっているもの、そして「意識の経験の学」とも題される『精神現象学』が対象にする人間とその Wissen とは——すでに形成されたものとして対象に設定されているため、幼児からの形成過程が考慮外になっているとはいえ——経験をとおして浮かびあがってくる人間

1
でありその自己認識なのである。

『精神現象学』の提示する課題——経験をとおして生まれる自己を認識する道

5
幼児から教えられてきた知識・理解、長年の科学研究によって蓄積されてきた知識・理解は、個々人の自己理解にも他者理解にも資するところ少ない。それは特に自分がわからなくなってくる時期にいちじるしくなる。どこ

10
でどのような知識・理解を習得しようとも、人間とその世界についてひとりの人間が確定的に語れるところは狭く、確定的かつ客観的に語ろうとするなら、いきおい領域を限定する必要にせまられる。しかしそれは経験をとおして生まれる自己を認識する道ではない。個々の人間の経験を無視ないし排除して得られた認識は、経験の主体である個別の人間のなかに形成され保持されている経験的な自己——誰もがかかえ、誰にとってもこれほど親密なものはないが、また誰にとってもわかりがたい自己——には、なおとどかない。自己認識は経験をとおさないかぎり得られない。ところがその自己認識は、「序に代えて」で指摘したように、往々にして世間のなかで

15
自覚される自分を超えない。結果的に、経験をとおして生まれる自己は、なお世間のなかでの自分が獲得する認識の彼岸にある。世間のなかで自覚された自分を基盤に積みあげられ練りあげられた科学的知見にも同様のことが言える。当然、個別の者の個別の経験から人間にかんするどのような一般的な理解がうまれるかは、依然として世間知と先端的な科学の外にある。

その経験がどこまで伸びるかはヘーゲルの叙述を追う過程でおいおい明らかになってくるであろうし、経験の意味自体、幾段階にもわたって考察されることになる。ヘーゲルの文章はなんともはなはだしく抽象的であるが、これまでの検討に照らすかぎりヘーゲルが対象とする人間とその *Wisson* とは生身の人間のそれである。そ

1 のかぎりヘーゲルの語る「あらわれるがまま」は素朴な日常の意識にそくした表現である。考察主体であるヘーゲル自身が生身の人間である。この生身のヘーゲルは二十代後半のある時期、なにごとかを体験して、ある確信を得た。と同時に、終わりのないものをかかえてしまった。と言うより、むしろ、確信はその終わりのなきものと一体となって生まれた、と言いきらわすほうがより実情にかなっていたであろう。この一体性のため、確信は以後の生涯をつらぬく確信となったが、確信と一体になったものが終わりのないものであるため、確信自体がヘーゲルの経験をとおして変容してゆかざるをえず、「意識の経験の学」は『精神現象学』の後にも続くことになった。したがって、ここで対象となる *Wissen* をヘーゲル自身のものとして考察するとなれば、結果はその途上での成果である『精神現象学』を著した当時のヘーゲルの人間としての在り方と認識能力を全面的に問うものになってくる。

10 その結果がどうなるかは、この著作を最後まで注解して語りえるものである。考察対象の *Wissen* が他の人のものである場合も、最終的に得られる認識が人の内面を読みとるヘーゲルの力に依存するため、事情は同様となる。以上の点を念頭におきながら、ここでは、ヘーゲルが対象とする人間とその *Wissen* とが生身の人間のそれであるという点から、あらためて内容を検討することにしよう。ヘーゲルの語る「あらわれるがまま」が素朴な日常の意識にそくした表現であり、考察主体であるヘーゲル自身が生身の人間であるかぎり、素朴な日常の *Wissen* にそぐわない表現があるので、なおさらこの点から検討する必要がある。

「あらわれるがまま」 (*wie es sich darbietet*)

ヘーゲルは「この知が「私にたいして」あらわれるがままに」と語る。素朴な日常の *Wissen* ないし意識にそ

1 あり、フィクションになる。

しかしだからといって対象を「現象する」と見るヘーゲルの態度が無意味になったわけではない。だれであれなにかを知ろうとするとき、その存在を感知するだけではまったく足りない。感知したものに注意をむけるだけでも足りない。どうしてもその存在がなんなのかを考える態勢を整えなければならない。存在の感知から考えぬいた結果までを一瞬にして見抜くのは練達の士にして初めて可能なことで、一歩ずつ考えをつみかさねながら対象を明らかにしようとするかぎり、このように考察の場を整えることは避けがたく、実のところ整えられた場がフィクションであるかどうかを問うことはほとんど無意味である。生身の人間の生活感覚が現実とみなすもの自体、このような態勢から得られた経験にもとづいているであろう。

10 ではヘーゲルが自分の Wissen を対象にした場合はどうか。その場合にも対象にはじめから種々の操作をくわえたのでは対象を正確にとらえることができないのだから、ヘーゲルは、当初、考察対象である自分の Wissen をあるがままに据えなければならぬはずである。したがって「この知が「私にたいして」あらわれるがままに、だからそのなものにも変更をくわえず」と記したヘーゲルのことばは、ヘーゲルが自分自身の Wissen を対象にしたときにも当てはまる。しかし考察対象である自分の Wissen が自分にたいしてあらわれるためには、ヘーゲルが自分をふりかえることが必要である。自分をふりかえずに自分の Wissen をとらえることはだれにあっても不可能であろう。他の人から指摘されて自分の言動の在り方に気づく場合でも、気づいた瞬間には——直覚的にでも——自分をふりかえっている。自分をふりかえったとき、自分はふりかえる自分とふりかえられる自分とに分裂する。しかしこの分裂は当初の「あらわれるがまま」という設定に反する。結局、対象がヘーゲル自身の Wissen の場合にも、「それがそれ自体をあらわすがままに」はやはりフィクションになる。

受けいれる態度を (aufnehmend)

しかし断言するのはまだ早い。ここでは前に「受けいれる態度をとらなければならない」とあったことにも注意しなければならぬ。生身の人間の卑近な日常の意識にそくした状態が前提になっていることを忘れるわけにもゆかない。

生活のなかではだれもが朝起きてから夜ねるまでに人とことばを交わす。それが普通である。ことばを交わす相手がいないときには自分を相手としてことばを交わす。そのどれもが相手にむかって発したことばであり、自分の知っていること感じたこと考えたことを相手に伝えたことばである。相手にさしだしたことばである。そうしたことばを相手にさしたとき、相手からろくに話もきかないうちに自分の判断を押しついたり、相手をどうこう決めついたりするのは望ましくない。生活のなかではまず相手を——相手の言うことを、相手のさしだすことばを——受けいれる態度をとらなければならない。この態度はヘーゲルの語る「受けいれる態度をとらなければならない」にそのまま重なる。「それがそれ自体をあらわすがままに」もこの態度とかさなる。ヘーゲルが多数の人々の Wissen に耳を傾けようとしていたと考えたらぬ理由はどこにも見いだしがたい。日常の卑近な意識が現実とみなすものをそのまま現実とした場合のフィクション問題はこれで解消する。

では二番目に指摘したフィクションはどうなるのか。

この第一段落を書いていたときのヘーゲルには自分の Wissen も対象にふくまれるという意識が希薄だったと考えれば問題は解決するだろう。しかしそう受けとめたのでは後に検討する意識の在り方と齟齬をきたす。それならヘーゲルは自分の Begreifen が自他の意識の在り方を毫も変えないと見なしていたと考えるべきなのだろう

1 か。これは註解を進める過程で確認すべきことであり、まだ断定できない。ここで確定的に言えることは、ヘーゲルが考察者ヘーゲルと被考察者ヘーゲルとに分裂するという事実だけである。

「理解 Auffassen」 と「概念的的理解 Begreifen」

5 考察者ヘーゲルは感じ考える人間であり、被考察者ヘーゲルもまた感じ考える人間である。分裂したヘーゲルについては、まずこのように受けとめてよからう。ただ、被考察者ヘーゲルは第一に生活のなかにあるヘーゲルと捉えてよかつたのだから、それはさまざまのを感じ、感じながら考えているヘーゲルであると思わなければならない。さらに言うならば、盲目でもなく、耳も聞こえ、触覚や味覚もそなえた人間であり、ビール好きの人間でもある。したがって、ヘーゲルが喉ごしに飲んだビールの味や、ビールを飲みながらおしゃべりしていたときにヘーゲルが感じ考えた事柄が、被考察者ヘーゲルの *Wiszen* の内容をなす。そのヘーゲルのなかで、五感の働きと考える働きとは、どちらが優勢でどちらが劣勢かは、問えない状態にあるだろう。

10 とところが、考察者ヘーゲルの場合には、考察する活動が前面にでてくる。その意味では、考察者ヘーゲルは第一に考える人間と受けとめなければならない。しかも、その考える活動は、冒頭に訳した文——一読しただけではなんのことが書いてあるのかわからない文——を考えだした活動である。ビールやワインを飲みながら、店主と他愛ない雑談をしていたヘーゲルがこのような文を語ることはなかったであろう。被考察者ヘーゲルと考察者ヘーゲルの考える活動は質的にちがっていたと見なければならぬ。

15 そもそも、考察者ヘーゲルはもっぱら考察することで存在をたもっているのだから、考察者ヘーゲルがビールを飲むことはありえない。人間ヘーゲルがビールを飲み、おしゃべりをするとしても、その行為は被考察者ヘー

1 ゲルのものにならざるをえない。二番目の文の最後に記されている「その理解から概念的把握を遠ざけておかなければならない」は、このように分裂したヘーゲルのそれぞれにそなわる思考活動の違いに対応すると受けとめられる。つまり「理解」は被考察者のもの、「概念的把握」は考察者のものである。もちろんヘーゲル以外の多数の人々も前者に属する。

5 「理解」と訳した名詞 *Auffassen* は *auf* (元遂) + *fassen* (つかむ) から成る。「つかむ」は「手でつかむ」の「つかむ」にはかならず、動詞 *auffassen* の基本義は日本語で「しっかりとつかむ」と言いあらわすことができる。この身体動作を基礎とする動詞が心的な「理解する」の意をおびるようになった過程には、他の多くの動詞と同じように、物的な意味から心的な意味への移行を想定することができるだろうし、そう想定しなければこの語を統一的に理解することができない。

10 他方、「概念的把握」と訳した *Begreifen* もまた、基本義自体は *Auffassen* とほとんど変わりが無い。この語は *be-* (強意) + *greifen* (つかむ) から成る。ふたつの構成要素の意味を組みあわせて動詞 *Begreifen* を日本語にするなら、「よくつかむ」と訳すこともできるであろうし、「しっかりとつかむ」と訳すことも可能である。訳の違いは「強意」の *be-* の訳し方ひとつの違いになる。それだけでなく、前綴りをのぞいた *fassen* と *greifen* とは——語源的に異なっている、そして *fassen* には保持の念がふくまれるが——その基本動作を日本語であらわすなら、どちらも「つかむ」である。心的な働きに適用されたときにも、その基本義には変わりがないであろう。ところが、ヘーゲル関連の翻訳に照らすところ、*Begreifen* は「概念的把握」と訳され、その一部に「概念」が

1 もちいられるが、「理解」と訳した Auffassen にこの訳語がもちいられることはない。

なぜなのだろう。動詞 auffassen は「解釈する」や「把握する」とも訳せる語で、auffassen するときに概念がもちいられることは疑いない。そもそも、生活のなかで感じ考えるとき、概念がなければ、考えること自体が不可能であろう。

5

「概念」

しかし、日本語を母語として育った人のなかで、そう言われてすぐ頷ける人はきわめて少数であると推測される。その理由は「概念」が元来は翻訳語であり、いまなお日本語の日常語に属さない点にある。なぜ属さないかはともかくとして、生活のなかでこの語を耳にすることはほとんど皆無であろう。しかもその意味が必ずしも明確ではない。あるいはその説明が簡単ではない。簡単には済まない。そうではあるが、原語がなんであり、その歴史がどれほど長く、歴史的な意味の変遷がどれほど複雑であろうとも、誰もが概念をもちいて考えているとあれば、その基本義は生活体験のなかで確認できるはずである。ここでは、アメリカの教育家かつ社会福祉事業家

10

一 ちなみに、岩波全集訳の場合、Aufassen は「捕捉すること」、Begriffen は「概念的把握」である。長谷川訳では「示された対象になんの変更も加えず、そこに概念をもちこんだりしてはならない」と、Aufassen の訳自体が抜けている。翻訳だけで『精神現象学』を読もうとする読者の便をはかったのであろうか。牧野訳にも Aufassen の訳語と読める語はない。榎山訳では「把握から概念的把握（ただ対象を感覚的につかむのではなく、そうなることの含む論理を、発生の過程と結果を含めて、理解し概念をうること）を引き離して……」とある。違いがわかりにくいので一応の補足をしたのであろうが、この説明を理解するにはそれなりに哲学の素養が必要である。

15

1 であつたヘレン・ケラーの有名な逸話から、その基本義を確認することにしよう。そうすれば、概念が不可欠であることもまた、確認できるからである。

5 幼児期にかかった病気のために視力と聴力をうしない話すこともできなくなったヘレン・ケラーは、七歳のころ家庭教師としてやってきたサリヴァンから、なんにでも名称があり、その名称は文字で書くことができるということを教わる。具体的には、触れたものすべての名称を掌に一字ずつ書いてもらつて教わる。そのようにして数多くの名称を知ることができたが、名称に意味があることがわかり心躍つたのは、戸外でポンプから汲まれた水に一方の手をさらし、他方に「ミズ」と何度もつづられたときのことであると伝えられる。

10 身のまわりのさまざまな物は手を触れることで確認できる。その名称は掌に文字を書いてもらうことで知ることができる。それでも双方をむすびつけることができない。ことばの獲得に不可欠な両者のむすびつきが、あいかわらず得られない。結果的に物の意味がわからない。それが、水の体験で物と名称とが結びついたときになつてはじめて物の「意味」がわかつたということ、これは示唆的である。そのとき脳裏にはなにか生まれるものがあつたはずである。その脳裏に生まれたものが「概念」である。物質としての水と「ミズ」ということばがむすびついたとき脳裏に生まれたもの、あるいは物質としての水に触れているうちに、それがなんなのかがわかつたとき脳裏に生まれたものが、水の「概念」だつたということになる。ヘレン・ケラーの自伝は、この概念が得られた瞬間の歓喜と、概念の獲得によつて周囲の世界との結びつきが得られた幼い心のふるえるような喜びとをよく伝えている。

15 概念の獲得はふつう幼児期におわるため、体験から概念が生まれる瞬間が報告されることはない。ヘレン・ケラーの体験したこのエピソードは通常ならありえない事態である。だからこそ重要性が認識され、このエピソード

1
ドは広く一般に伝えられるようになったのであろう。この「概念」は英語では concept で、その語義を簡潔に示すなら、「母親が子どもを胎内にやどすように頭にやどしたもの」である。脳裏に生まれたもの、あるいは脳裏にむすんだものは漠然としており、それをことばで説明することはほとんどできないので、「概ねの念^{おおむね}」という呼称はきわめて適切である。

5

意味

その「概念」が「意味」とも言われ、このほうが一般に多用されるのは、すでに右の説明にあるように、概念を名称との関連でとらえることもできるからであり、そのほうが生活のなかでは普通だからである。

10
名称との関連でとらえられた「意味」とは、「名称が指し示すもの」である。まず「意味」をそのように限定して受けとめよう。このように限定して「ミズ」という名称の意味を問うなら、その「意味」には「物質としての水」と「水 of 概念」との双方が可能である。水や石やりんごや犬のように対象が身近なものである場合、前者の意味（現実存在するもの）は触れたり食べたり見たりすれば一目瞭然とする。

15
ところが後者の意味はそうではない。概念は通常ことばで示す以外にないが、それをことばで示そうとすると取捨がつかない。脳裏には——輪郭が鮮明であるかどうかはともかく——それなりに明確なイメージが浮かんでおり、そのイメージとともに理解されている事柄が「概念」の実質的な内容になる。ところが、その内容をあらためてことばで説明しようとする、しどろもどろの説明にしかならない。「ミズ」の場合でも、実際に見せればすぐわかるのにも思いながら、「水道の蛇口をひねると出てくるもの」など、これでは海の水がふくまれないと思いつながら、便宜的な説明でお茶をにごす羽目になる。

1

このようなときには辞書にたよることもめずらしくない。しかし、「自然界に広く分布する液体で、海水となつて地表面積の七三パーセントを覆い、水蒸気となつて大氣中に拡散し、水滴となつて雲や霧などを生じ、雨や雪などとなつて地表に降り、川となつて流れ、溜まって池や湖沼となる。……」（『日本国語大辞典』）という説明は、水がなんであるかの説明ではない。実のところこれは人間の生活環境のなかで水の存在する状態をことばにした描写であり、一般に辞書に記載されているだろうと期待される簡潔な定義から隔たっていることはなほだしい。

5

それなら、つまり簡潔を旨とするなら、水の意味はH₂Oであると言えばよいではないか、と思われるかもしれない。しかしこの表記は原子表に象徴される物理学の理解を前提とする。物理学上の理解の網の目は日常の語彙が機能する域を超えたところにある。

10

日常の語彙で説明しがたいという点は、単独の意味だけでなく、類似した意味の場合にも当てはまる。石と岩の違いをことばで示すことは一応のところ可能であろうが、大きい石と小さい岩が同じサイズなのかどうかに確定的な答はない。

体験

15

水の場合にも、石と岩の違いの場合にも——つまり単独の意味の場合にも、類似した複数の意味の場合にも——理解にとつては体験が不可欠である。体験とは——ここでの文脈では——現実に存在するものに実際に接することである。見たり聞いたり触ったりすることである。しかし一回の体験で現実に存在するものが充分に理解されることはほとんどない。最初の理解はかなり粗い。体験する回数がふえるにつれ、しだいに細部もとらえられ

1 るようになるだろう。日常生活のなかで身のまわりのものを体験するのは幼児期からなるため、確定的には語りがたいことが多いが、それでも、同一の名称に属するものを何度も体験し、他の名称のものとの違いがわかるようになって、そして身のまわりの世界のなかで対象が占める位置や在り方がわかるようになって、一応の理解が定着すると言えるだろう。

5 このように理解が定着した段階で、つまりことばによる説明はなおほとんど不可能であるとしても、あるいはまともな説明はほとんどおこなわれないのが普通であるとしても、一応のところそのように理解が定着した段階で、体験は一般に「経験」と呼ばれるものになると捉えることができる。この場合の「経験」とは、「現実に存在するものに実際に接すること」というの意味の「体験」に、「体験した対象の理解」を加えたものである。この「経験」の理解はなおまったく暫定的であるが、日常的な名称の場合、不確定な側面があるとしても、そして個人差を全面的に解消することはできないとしても、歴大な数の人が現実に存在するもの（現物）を体験し、それを経験にもたらしたところで意味を共有し、それでことばは機能していると言えるであろう。

概念・意味・体験

15 ところが、ことばを形容詞や副詞や助詞（欧米語なら前置詞）にまで拡大したとき、今度は単純に体験にうつたえることが困難になる。助詞の「に」や「を」は体験ではまったく示せない。その理解には文脈や文例が必要である。文脈や文例が必要であるということは、助詞「に」や「を」だけでは、「指し示すもの」が不明であることを意味する。あるいは脳裏にむすぶものがなにもないことを意味する。ことばはある。助詞として限定された「に」としてある。あるいは「を」としてある。しかしそれだけではなにも指し示さない。それだけではな

も脳裏にむすばない。なにも指し示すものがないときに意味があるとは言えないであろう。同様に、イメージであれなんであれ、なにも脳裏にむすぶものがないとき、概念が存在しているとは言えないであろう。助詞の場合には、具体的にもちいられる場面を文例とともに設定してはじめて、(おそらくは水や石やりんごや犬の場合とは質のちがう)意味ないし概念の存在する可能性が生まれるにすぎない。これはなお助詞が機能する基盤にも体験が不可欠であることを証する。

他方、形容詞や副詞なら、それが「指し示すもの」は脳裏にいだかれていようであろう。したがって「意味」は存在しているであろうし、「脳裏に生まれたもの(≡むすばれたもの)」としての「概念」は存在しているであろう。だが、俗に「蓼食う虫も好き好き」や「痘痕もえくぼ」と言われるように、味覚や美醜は人により理解が異なり、それに応じて形容詞と副詞は指示対象や対象の範囲に違いがでてくる。これもまた文脈がなければ、あるいは文例を提示しなければ、そして文脈ないし文例とともに理解しなければ、その意味(あるいは概念)的確に受けとめる可能性は生まれない。この事実、そして外国語の習得にさいして、個々の形容詞や副詞の基盤に想定される体験を自分の体験とすり合わせる事が容易でないという事実もまた、体験が意味ないし概念の存在にとって不可欠であることを意味するが、同時に意味であれ概念であれ、他の語で説明することには限界があることを証してあまりある。

不可欠な概念・その概念を排除するヘーゲル

以上は概略的な検討にすぎないが、それでも、ことばをもちいるかぎり概念が不可欠であり、体験を基盤として生まれる概念がなければ考えることもできないということは頷けるはずである。ところが、ヘーゲルの文章

1 では、そしてヘーゲル関連の翻訳に照らすなら、その概念が生身の人間として生活する人間の理解 (Aufpassen) から排除されている。

なぜなのか。

5 この疑問にたいする答をこの段落から得ることはできない。この段落を締めくくる「その理解から概念的把握を遠ざけておかなければならない」という指摘から明示的にわかることは、被考察者ヘーゲルの Wissen であればかのだれの Wissen であれ、対象にすえられた Wissen に考察者ヘーゲルの考える活動をおよぼしてはならない、という点だけである。

10 考察者ヘーゲルが自分の考える活動を対象となる Wissen におよぼしてはならないという抑制は、すでに検討した「この知が〔私にたいして〕あらわれるがままに、だからそのなものにも変更をくわえ」ないで、その Wissen を対象にすえなければならぬ、という指摘と結局は同意である。明らかかなことは、ここでヘーゲルは、被考察者ヘーゲル (あるいはそのヘーゲルが代表する人々) の感じ考える働きを Aufpassen と呼び、自分 (つまり考察者ヘーゲル) の考える働きを Begreifen と呼んで、両者を区別していることである。ヘーゲルは Aufpassen と Begreifen とをそれぞれに割りふったと言いあらわしてもよい。

15 約言すると、「あるがままに」や「あらわれるがままに」は、実質的に、Begreifen を対象におよぼしていない状態を意味する。そう設定した枠組のなかで Wissen の考察がはじまる。しかもその考察は Begreifen によっておこなわれる。それなら、第一段落全体がこのように対象にむかう態度や対象のあらわれ方を設定した Begreifen によって統御されており、その統御をふくめた思考活動がこの第一段落から読みとれる Begreifen の実質的な意味であるということになろう。

1

今後この *Begriffen* の働きが叙述の前面にでてくることは推測にたたくない。しかし *Auffassen* のもとにどのような知識・理解が想定され、*Begriffen* のもとにさらにどのような知識・理解が想定されているかは、ヘーゲルがさらになにをどのように説明するかにかかっている。ヘーゲルの書いた文章を註解しているここでは、「その理解から概念的把握を遠ざけておかなければならない」という指摘から浮かびあがった疑問や種々の問題にかんしては、以後のヘーゲルの説明を待たなければならぬ。

5

以上から、意味の不明な「概念的把握」をそのまま残して二番目の文をやや敷衍するなら、「知るといふ活動や知識・理解がそのように人間の感じ考える能力だけを前提として対象にすえられ、しかも対象と私とのあいだになにも介在していないとあれば、その活動や知識・理解をとらえようとしている私のみならず対象をゆがめてはならないのだから、私もまた対象があるがままに受けとめる態勢をたまたなければならぬ。知るといふ活動や知識・理解が私に対してあらわれるがままに、だからそのなかの何ひとつ変更せず、ものを知る営みにそなわる理解活動から概念的に把握する私の活動を遠ざけておかなければならぬ」となる。

10

このように敷衍するなら文意の説明はほとんど不要である。ヘーゲルは人間が日常のごとく感じ考えている状態があるがままに対象に据えようとしている。早朝、爽快な気分を感じ考えていること、怠けてたまらないのに仕事にむかうときに感じ考えていることを、あるがままに対象にすえ、その内容をとらえようとしているのである。

15

一旦のまとめ

これで第一段落の検討がおわったので内容をまとめよう。

1

ヘーゲルは人間に考える能力があることを前提として冒頭の文を書いている。そのように想定しないと『精神現象学』という書物が書かれたことさえ説明できない。さらに、人間には五感の働きがそなわっていることも前提にして書いている。そう想定しないと題中の「感覚的確信」が意味をうしなう。要するに、ヘーゲルは感じ考える人間の在り方を、しかもその感じ考える生身の人間が現実存在することを前提として、その人間の *Wissen* を考察の対象に据え、その *Wissen* を自分にあらわれるがままに考察しようとして『精神現象学』を書きはじめている。碎いて言いあらわすなら、人間の日常の状態を前提に——実質的にはそれを対象に——文章を書きはじめている、と記すことができる。

5

それなら始めからそのように断って書けばよかつたのではないか、という疑問とも不満ともつかぬ声が聞こえてきそうである。もつともなことであるが、その疑問ないし不満を全面的に肯定することはできない。第一の理由

10

は設定された読者層である。十九世紀初頭のドイツで、哲学はなお学問の王者としての地位をアカデミズムのなかでたもっており、ヘーゲルその他の哲学者は読者がすでに哲学の素養をもっていることを前提に著作活動をおこなっている。それだけでなく、自分の著作に先行して出版された著作は読者も読んでいることを前提に自分の考えるところを書物にまとめる。ところが、現在の日本で、哲学はわからないものと受けとめられている。あるいは——これはドイツでも現在は同一の事情にあるが——哲学は存在しないも同然の学問になっている。基本前提がこれほど異なっていてなお『精神現象学』を理解しようとするなら、現在の読者は自分の理解水準をこの著作が理解できるところまで高める以外にない。

15

第二の理由は第一の理由から派生するもので、著者は一般に自明と思うことは書かないほうが普通であるという点にもとめられる。無自覚に書かずにすましてしまうものがあることも珍しくはない。結果的に読者層の設定

1
が充分に練られないまま文章が書かれる。これが第三の理由になる。ところが、読者には、どこまでが著者の不
手際でどこまでが自分の理解不足なのか、最初はわからないほうが普通である。そのため理解がどうにもはかば
かしく進まない。理解が進まないのは自分が悪いとさえ思いかねない。叙述が不十分であるためにこの状態が生
まれていくなら、それは望ましくない副作用である。この種の副作用が生じてくるという意味では、哲学書は一
般に舌足らずの傾向があるが、第一段落に見られるヘーゲルの文章はかなり舌足らずである。

5
この舌足らずに関連して第四の理由がでてくる。それはこの著作を出版したヘーゲルの年齢である。ヘーゲル
はまだ若く、荒削りで、性急である。おそらく、読者の理解水準を広く推しはかり、その状態を充分に考慮しな
がら文章を書くだけの余裕はなかったであろう。それでもこの著作を読むなら、その欠点をおぎなうて読む努力
が必要である。『精神現象学』を読みすすめるなら、本質的にわかりがたい内容が取りあげられている箇所直
面することになり、それを第五の理由とすることも可能であるが、これまでに検討した部分はまだこの理由が意
味をもつ場面ではない。したがって、第一から第四までの理由を考慮するところ、ヘーゲルの叙述はきわめて不
完全なものであり、思うように理解が進まないのはそのためであると捉えてよい。これまで検討の途中で幾度か
ヘーゲルのことばを敷衍したのはそのためである。一旦のまとめとなるここでは、以下にその結果を整理して掲
載する。

10
15
——ドイツ語で *Wissen* と呼ばれるものがある。ドイツ語を知っている人なら、そう言われればすぐ念頭に思
い浮かぶものがあるだろう。私はこれからその *Wissen* (知ること) がどのような活動であり、その結果得られ
る知識や理解 (*Wissen*) が一般にどのような性質をもつかを考察することにしよう。

その際、人間に考える能力や感じる能力があるのと言うまでもないことだから、それは前提とし、前提にした

1 ものについては触れないで話をするにしよう。前提という点では、もうひとつ前提とすることがある。それは、知るといふ活動やその結果を考察対象にすえたとき、私と対象のあいだには、私を知るといふことを対象に据えることに決めたという事実以外のことはなにも介入していない、という点である。

5 以上の二点を前提にした場合、私は対象と私のあいだになにも介入するものがない状態で、つまり「直接的に」知る活動とその結果を対象にしていたことになる。しかも対象にすえられたもの自体が直接的な知識・理解、つまり「五感の働きをとおして」直接的に知られるもの、「あるいは五感の働きをとおして」存在が知られるものの知識・理解になる。

10 知るといふ活動や知識・理解がそのように人間の感じ考える能力だけを前提として対象に据えられているとき、その活動や知識・理解をとらえようとしている私のみならず対象をゆがめてはならないのだから、私もまた対象をあるがままに受けとめる態勢をたまたなければならぬ。知るといふ活動や知識・理解が私にたいしてあらわれるがままに、そのなかのなにひとつ変更せず、ものを知る営みにそなわる理解活動から概念的に把握する私の活動を遠ざけておかなければならない。――

15 以上の内容を生身の人間の卑近な日常のなかで記述するならば、世間のなかで生活する多数の人のなかから、任意のひとりを取りあげ、その人を *Wissen* としてあらわれるがままに考察する、と記すことが可能である。第一段落の内容は実質的にこれだけである。